

令和6年度若手技術者・経営者向け実践型 海外派遣（ネパール）プログラム報告書



公益財団法人福岡県国際交流センター

令和6年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム

研修スケジュール

【事前研修】2024年

日程	内容	場所
11月17日(日)	国内研修(ネパールの概要、社会的課題など)	アクロス福岡
12月14日(土)	国内研修(グループワーク)	アクロス福岡

【海外派遣(ネパール)】2025年

日程	内容	宿泊/視察先
1月13日(月・祝)	出国(福岡空港~バンコク経由~カトマンズ空港)	カトマンズ
1月14日(火)	<ul style="list-style-type: none"> ・国連ハビタットネパール事務所 ・地元行政関係者との意見交換、昼食会(大震災後、文化遺産集落における復興の取り組みなど) ・観光開発、職業訓練(木彫り工芸)施設視察など 	カトマンズ/ ラリトプル市・ ブンガマティ
1月15日(水)	<ul style="list-style-type: none"> ・高地の観光地、チャンドラギリ市表敬(防災教育、日本の技術を生かした災害に強い山岳トンネルの整備状況の説明) ・地すべり危険区域にある農業訓練校視察 ・地元の災害復興や貧困層支援に取り組む女性らのNPO「ルマンティ」と意見交換など 	カトマンズ/ チャンドラギリ 市、ラリトプル 市・ダパケル
1月16日(木)	<ul style="list-style-type: none"> ・屋上農園、廃材再利用の歩道など、持続可能な都市基盤整備の状況視察、関係者と意見交換 ・福岡県内企業の技術を使った雨水貯水タンクや太陽光発電を設置した診療所の視察、関係者と意見交換 ・JICAネパール事務所所長らと意見交換、夕食など 	カトマンズ/ カトマンズ、ラ リトプル市
1月17日(金)	カトマンズ空港~バンコク経由	機内
1月18日(土)	帰国(福岡空港)	—

【事後研修・成果報告会】2025年

日程	内容	場所
2月1日(土)	国内研修(海外派遣を踏まえた、グループワーク)	アクロス福岡
2月15日(土)	成果報告会	アクロス福岡

■ 事前国内研修の様子



左：国連ハビタットによる講義



右：グループワークセッション

■ 海外派遣（ネパール）の様子



左：震災からの復興に取り組む
伝統的建築寺院



右：都市部の生活貯水池

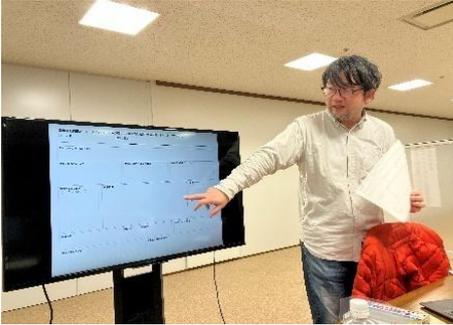


左：福岡県内の企業の技術を導入し、地下の雨水貯水施設からくみ上げた生活水を利用する病院施設（屋上）



右：貯めた雨水と屋上スペースを利用して、野菜などを栽培する「都市型農業」の取り組み

■ 事後国内研修の様子



■ 成果報告会



株式会社ニシケン
内橋 佑介

- ・国連ハビタットネパール事務所訪問、オリエンテーション
現地の都市開発の課題や進行中のプロジェクトに関するプレゼンテーションを拝見いたしました。ネパール政府と協力して活動をしており、「街の開発」、「社会貢献」、「土地の有効活用」をベースに実施しておりました。支援者が全てを完結するのではなく、伝統を守り、現地の方が自分たちで復興を行う、サポートをされました。ネパールの都市化率は急速に上昇中で、インフラ整備が追いついておらず、地震被害の復興支援が依然として重要な課題と感じました。
- ・ブンガマティ地区の行政幹部との会合
木彫りの民芸品が伝統工芸でほとんどの世帯が木彫りの職業に就かれていましたが、2015年ネパール大地震により職人の数が半減。行政と国連ハビタットが協力し、地震被害後の伝統的建築物の修復、観光資源としての地域復興計画（ホテル、飲食店）、基礎インフラ（道路、水供給、電力）の整備を行っていました。現地の方の意向に沿った支援の仕方に感銘を受けました。
- ・チャンドラギリ市長、幹部職員との会合
2015年の地震で大きな被害を受けた地域であり、現在も地滑りや洪水などの災害が頻繁に起きている地域です。また、急速な都市化に伴う課題としてインフラの整備が進んでおらず、特に道路、トンネル関係が急務になっています。現在、株式会社安藤・間がネパール初のトンネル工事を行っておりますが、掘削機械はネパールにはなく、インドから陸送で運んでいるそうです。また、水が少ない地域でもあり、水をどのように貯水するかも課題であるとのこと。ネパールは全地域、水が不足しており、各家庭、水タンクで雨水を貯水しておりました。
- ・ルマンティ（NPO）との会合（パタン市）
1990年女性だけのコミュニティで立ち上がり、難民のサポートをスタートとしてカトマンズの川沿いでテント生活する方の支援が始まり。現在はマイクロ・ファイナンスも行っており、18の地域でサポートをしています。地域でコミュニティを作り、互いに助け合い自分たちで動かしていく様子にかなりの刺激を感じました。
- ・農園、学校、公園の視察（ラリトプル市）
「Story Cycle」、「HASERA」の方のお話を聞かせて頂き、実際の現場を視察させて頂きました。主に屋上菜園の方法を教える活動をされており、実際に屋上菜園をされている学校を訪問致しました。育てた食物は学校の寮の食料にし、ご家庭ではバザーで販売するなどをサポートされていました。作物の作り方から、バザーでの販売方法までをサポートされており、全て低コストで行っておりました。
- ・「ためとつと」視察（パタン市）
株式会社大建さんが手掛ける「ためとつと」を視察致しました。水不足が深刻な課題であるネパールでは重要なシステムで雨水を生活水に浄水する仕組みで、UNハビタット、JICAを通してネパールのほかに5か国に設置されています。利益を考えず援助を行う大建さん、松尾社長の考え方に刺激を受けました。

【今回の視察から得られた学び】

2015年の大地震に加え、急速な都市化により、インフラの整備が追い付いていない状況でした。住居はもちろん、道路、上下水道、電気の未整備が多く見られました。物価の違いから日本企業ではコストがなかなか見合わないのではないかと思います。重機や福祉用具のレンタルの需要は高いのではないかと思います。実際にネパールに訪問したことで、企業として、また個人としても何か復興・インフラ整備に関わっていきたいと思いました。また、現地で学んだことを元に社内のネパールの方が活躍できる環境を作り、今後も海外の方の採用に努めたいと思います。

【今後の JICA・UN - Habitat との連携】

UN-Habitat、一緒に参加されていた JICA 九州さんを活用して、海外展開に向けても知識を付けていきたいと思っております。過去の例として、福岡の株式会社ウエスト・マネージメントさんは JICA 九州と共同してカンボジアへの中古重機の輸出を成功されており、弊社でも検討の余地はあるのではないかと考えております。

【感想】

ネパールの子供たちの笑顔が本当にとっても印象的でした。欲深さを感じず、平和に暮らしている様子が伺えました。もちろん、困っていること、不便なことはあると思いますが、あの笑顔は大事にしてほしいと思いました。また、彼らの1番の考え方である「人助け」に対しても刺激を受けました。お金を稼ぐだけでなく、人助けの次に儲けを考える。日本人が忘れていないかと感じました。

以上

令和6年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム視察報告書

九州スタッフ株式会社

大霜 彰子

【視察場所】 ブンガマティ地区 トレーニングセンター(観光開発・職業技能関連)、再生池、博物館、ネワール族の集落など／チャンドラギリ市長表敬訪問、ガネスマン・ポリテクニク・インスティテュート(職業訓練校)、マツェガウン(市役所周辺の伝統的集落)／ラリトプル市ダパケル「ルマンティ」訪問／「Story Cycle」、「HASERA」活動の学校屋上デモ農園、公園(透水性の高いリサイクルレンガ舗装材)ラリトプル市「ためとつと」、太陽光発電

【目的】国内研修や現地視察を通して、発展途上国の社会的課題に貢献できる事業を考える。首都カトマンズを拠点に、震災で崩壊した寺院や住宅の復興と再生、暮らしに欠かせない安全な水の確保、家屋の屋上を活用した都市型農業の取り組みなどを視察し、現地の暮らしを支えるプランづくりにチャレンジする。

【視察レポート】

○視察1日目

木彫りで知られるブンガマティ地区を視察。ブンガマティの木工の里としての始まりは17～18世紀ごろ、盆地で栄えた王朝の建造物を飾る目的で職人が集住したため。2015年の大地震後には全半壊した寺院や宮殿の修復、再建でも活躍した。トレーニングセンターでは、新たな担い手育成に力を注いでいる。ある程度の収入が見込めるため、手に職をつけられるので女性進出にも期待。

また、この一帯は、雨の神や豊穡の神として崇められるマチェンドラナートの故郷とされ、シカラ様式のマチェンドラナート寺院がある。現地のネワール族伝統の蒸し菓子、ヨマリは大きな餅のようで、中に黒ゴマと黒糖の餡が入ったお菓子で、観光資源の名物にしようという動きがある。しかし、ネパール大震災後の復興の途中で再建にはまだまだ時間がかかりそうだが、国連ハビタットと連携して若い世代が活躍の場を広げているようだ。

○視察2日目

チャンドラギリ市長と面会。現在、ナグドゥンガトンネルという重要なトンネル工事が進行中で、このトンネルは、カトマンズとインドを結ぶ主要なルートの一部であり、災害に強い道路トンネルとして計画されている。このプロジェクトは、国際協力機構(JICA)が関わっており、円借款事業として支援し、ネパールの交通インフラの整備を進めている。日本の高度な技術とネパールの若い技術者たちの協力により進められている。受注企業は、日本工営株式会社と株式会社エイト日本技術開発、日本シビックコンサルタント株式会社の3社、施工業者は株式会社安藤・間。

ガネスマン・ポリテクニク・インスティテュートは、農業の職業訓練校。バイオ

エンジニアリングによる課題解決と災害リスクを軽減するための取り組みを視察。ネパールは、ここ最近の大雨の影響により各地において洪水や土砂崩れが発生し、多くの死亡者、行方不明者や家屋の損壊等が発生している。同校の裏手斜面においても大雨による土砂崩れが起きており、防災が課題となっている。

ネパールの貧困緩和を目的とした住居環境の改善、都市部の貧困層への住宅提供「ルマンティ」の代表と意見交換。非営利団体として1994年に設立、現在、ネパールの13の地区、29の都市センターがあり、スラムの改善、住宅プロジェクト、貯蓄と融資、水と衛生の介入、研究、アドボカシー、コミュニティ組織の強化などの活動を行っている。

○視察3日目

有機農業やパーマカルチャーを推進する「Story Cycle」、デジタル技術とストーリーテリングを活用した支援、農村地域の女性支援、フェアトレードの促進を行う「HASERA」と意見交換し、屋上農園を視察。ネパールの農業は、農薬の過度な使用や教育やトレーニングの不足、人的資源の不足が課題で、これらに対処しながら、持続可能な発展を目指す。

ネパールは、1年のうち9カ月は雨がほとんど降らないので水不足に悩まされるが、マハラクシミ市では、雨水貯蔵地下タンク「ためとつと」を視察。これは、雨水を集めて浄化し、貯水する技術で、九州大学との共同研究で開発されたもの。短時間で簡単に設置でき、飲料水並みの水質で雨水を貯水することができる。国際的にも評価されており、ラオスやベトナム、ケニアなどの国々でも導入されている。

○まとめ

ネパールはインドと中国に挟まれた細長い国で、面積は北海道の約1.8倍。世界最高峰のヒマラヤ山脈に抱かれ、海を持たない山岳国である。産業が発展する要素に乏しく、最低賃金は日本円で月1～2万円ほどで、多くの若者は海外移住を考えている現状がある。

しかし、ネパールは想像以上に観光の魅力に溢れる国で、古都で首都でもあるカトマンズはユネスコ世界文化遺産に登録され、国際ブランドのホテルが次々とオープンしており、外国旅行者の増加がうかがえる。

また、女性の社会進出が進んでいます。政治分野での女性の活躍が顕著で、憲法では、連邦議会議員のうち少なくとも33%が女性であることが保証されており、地方レベルでは最低40%が女性議員で構成される。視察したチャンドラギリ市の副市長は女性。

日本とネパールは、1956年に正式に国交が樹立されて以来、政治、経済、文化など多岐にわたって発展。ネパールから日本への留学生も多く、日本の大学で学んだ後、帰国し、ネパールの社会に貢献している人物も多くいる。日本とネパールの友好関係は、今後もさらに発展していくことが期待される。

以上

1. はじめに

私は、福岡県主催の「令和6年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム」に参加した。本プログラムは、発展途上国が抱える課題を学び、技術や知識を活かした解決策を検討することを目的としている。私はこの研修を通じて、多くのことを学び、考え、感じる機会を得た。本報告書では、研修の概要とともに、私自身が得た気づきや考察をまとめる。

2. 研修の概要

2.1 国内事前研修

本プログラムは、まず国内での事前研修から始まった。福岡市内で2回に分けて実施され、国連ハビタットの活動紹介、ネパールの社会課題に関する講義、過去の海外派遣参加者の体験談の共有、そしてワークショップが行われた。特に印象的だったのは、JICAの支援制度や、途上国における課題解決のためのアプローチについて学んだことである。さらに、グループワークでは、実際の課題に対して解決策を考えることで、事前にネパールでの活動の方向性を理解することができた。

2.2 ネパール現地研修

2025年1月13日から1月18日までの6日間、ネパールでの視察が行われた。カトマンズを拠点に、ラリトプル市、マハラクシミ市、チャンドラギリ市を訪問した。主な視察内容は次の3点である。

1点目は、震災復興の現場視察である。2015年の大地震で被害を受けた地域を訪れ、復興の現状や課題を学んだ。特に、伝統的建築技術を活用した復興が進められており、耐震性向上と文化的価値の維持が両立されている点が印象的であった。

2点目は、都市農業の実践である。屋上菜園の視察を通じて、持続可能な農業の可能性を学んだ。これは都市部で実施可能であり、日本においても適用の可能性があると考えた。

3点目は、地域住民との意見交換である。住民の声を直接聞くことで、現地の人々が抱える課題を深く理解することができた。特に、地震後の復興プロセスや住民参加の重要性についての議論が印象に残っており、我々が想定する課題と現地の方が実際に考えるものの違いを確認できた。

2.3 国内事後研修

帰国後に事後研修が実施された。ここでは、各グループが現地で得た知見をもとに、開発途上国の課題解決に向けたビジネスプランを策定した。また、成果報告会の準備も行い、発表資料の作成に取り組んだ。私たちのグループは、ネパールの防災能向上をテーマにし、現地で得た知見をもとに実現可能な解決策を提案した。

3. 研修を通じて考えたこと・感じたこと

3.1 災害に対する意識の違い

ネパールでは、地震や洪水による被害が多発しているものの、住民の防災意識が必ずしも高くないことが分かった。この状況を改善するためには、ハード（インフラ整備）だけでなく、ソフト（教育・啓発活動）の両面からのアプローチが必要だと感じた。特に、学校教育に防災意識を組み込むことで、次世代の住民がより災害に強い社会を築くことができると考えた。

3.2 持続可能な復興の必要性

視察を通して、単に建物を修復するだけでなく、持続可能な方法で復興を進めることの重要性を実感した。例えば、環境に配慮した建築資材の活用や、地域資源を活かした復興プロジェクトなどが求められる。特に、屋上菜園の取り組みは、都市部でも食糧生産を行いながら環境負荷を軽減する可能性を示しており、日本でも応用できると考えた。また、資金の確保が課題であることも明らかになり、国際機関や NGO との連携が重要であると感じた。

3.3 国際協力における現地理解の重要性

今回の研修を通して、国際協力を進める上で、現地の文化や価値観を尊重することの重要性を再認識した。日本の技術や制度をそのまま適用するのではなく、現地のニーズや生活様式に合わせた形で導入することが必要である。そのためには、現地の人々と継続的に対話を重ねることが不可欠だ。例えば、ネパールの村々では、住民主体のプロジェクトが成功しやすいことが確認できた。

3.4 今後のキャリアに与える影響

本プログラムは、私のキャリアに大きな影響を与えるであろう。特に、技術者としてどのように社会に貢献できるかを改めて考える機会となった。今後は、地盤工学や防災技術を活かして、国内外の災害対策に貢献したいと考えている。また、今回の研修を通して得た国際協力の視点を活かし、日本国内での防災教育の充実にも貢献したいと考える。

4. おわりに

本研修は、単なる視察ではなく、国際協力の現場での実践的な学びの場であった。ネパールの現状を肌で感じ、現地の人々と対話を重ねることで、国際協力の在り方について深く考えることができた。私は、今回の経験を活かし、今後の研究やキャリアにおいても国際的な視野を持ち続けたいと思う。

最後に、共に研修へ参加し交流させていただいたメンバーの皆様、および貴重な機会を提供して下さった福岡県国際交流センターと国連ハビタット福岡本部の皆様にも深く感謝申し上げます。

以上

令和6年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム報告書

サカイ工業株式会社
代表取締役 坂井 綾

福岡県と国連ハビタットが開催する海外研修が実施されると聞き、主人がフィジー人でいつもオセアニア方面のアイランドしか行かないので、ネパールという未踏の地に惹かれて若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラムへ参加することにしました。

令和6年のうちの事前研修では、九州国際大学国際社会学科准教授の藤井先生の楽しいポストイット研修により“初めまして”の参加メンバーと距離を縮めることができ、成果報告会に向けて、課題発見に関するアドバイスをいただきました。

国連ハビタットについて ハビタット福岡本部（星野本部長補佐官）
ハビタットと連携した海外展開について① 株式会社ミラクル（深江様）
ハビタットと連携した海外展開について② 株式会社エコシステム（高田様）
ハビタットと連携した海外展開について③ 株式会社大建（松尾様）
JICAの支援制度について JICA九州（渡邊様）
前年度事業（ラオス派遣）参加者の体験談 嶋田様
ネパールの概要、社会課題について、実施中のプロジェクトについて（英語研修）
ハビタット現地事務所 ハビタット石井調整官

上記 講師の方のお話もとても興味深いものでした。

久留米の小さな建設業・産業廃棄物処理業者に何ができるものなのか、ネパールの人々は何に困っているのか、何を求めているのか、行ってみないとわからないよね～と現地視察をとっても楽しみにしていました。

1月13日 前日に発熱し ネパール行きは断念しました。（結果インフルエンザA）

事後研修・成果発表 チームのお役に立てず、脇役のような立ち位置でしたが、若い方のエネルギーを感じ、ベテランの方のビジネスの見方も勉強になりました。

このプログラムのご縁に深く感謝します。

次回もこのプログラムが開催されるのであれば、前向きに参加の方向で行きたいと思います。

LOVE & PEACE IN THE WORLD

以上

令和6年度若手技術者・経営者向け実践型海外派遣プログラム報告書

株式会社 菱熱
寺崎 史尋

この度は本プログラムに参加させていただき誠にありがとうございました。
会社からの紹介で本プログラムに参加させて頂きましたが、国内では体験することのできない様々な貴重な経験をさせて頂きました。今回経験させて頂いたことは将来、海外事業に従事する上で大切なことばかりでしたので、本プログラムで学び得たことを下記に纏めさせて頂きます。

視察前国内研修では、各講師の方々にネパールの現状として都市部での水不足問題や地震や洪水などの自然災害問題があることや、これらの問題を解決するために国連ハビタットが主導で行っている支援事業についても教えて頂き、国際支援の重要性を学びました。さらに、藤井先生からは、参加者が各自で収集したネパールの現状に関する情報を基に、ネパールが抱える貧困問題や自然災害問題などの社会的課題を抽出する技法を教わり、明確化した社会的課題をどのようなビジネスで解決できるかを段階的に考えることができるよう的確なアドバイスをしていただきました。そのアドバイスの一つであるアイデアを多く引き出すブレインストーミングは今後の業務の中でも活用できる技法であると再認識させて頂きました。

現地視察では驚きと発見の連続でした。まず、ネパールのカトマンズ空港に到着した際、最初に目にしたのは空港内に安置されている黄金の仏像でした。そして翌日には、ラリトプル市のブンガマディ地区で、伝統工芸品としてヒンドゥー教のガネーシャ神の木彫りを拝見させていただき、また、ヒンドゥー教の教えに基づき、厄災から人々を守るために住居の一階が家畜を飼う構造になっていることなど、生活と宗教が非常に密接に結びついていることを強く感じました。

次に感じたことは2015年に発生した大地震の復興は十分に進んでおらず、今回訪問したどの地区でも倒壊したレンガ造りの建造物を散見されたことです。ネパール国土の17%しか平地がなく、大部分の土地が斜面に位置しており、地震に加えて、雨による土砂崩れなどの自然災害も頻繁に発生しています。このような厳しい状況から、復興が遅れていることを痛感しました。ただ、復興に関しては市町村に完全に任せるのではなく、今回お話を伺った「ルマンティ」などの現地住民から発足した団体があり、復興に対して非常に意欲的に取り組んであることが分かりました。

他にもネパール都市部は各家庭に水道管が整備されており、水不足の影響で2週間に1回しかない給水時に水を貯める高置水槽が各家庭に設置しているなど、私が予想していた以上にインフラが整備されていることや、政府が女性の社会進出を支援するため、市長が男性の場合、副市長は女性を任命するという政策を実施していることなど、現地でしか知り得ない貴重な情報に触れることができました。さらに、ネパール国内の電力供給の大部分が水力発電に依存していることなども学び、非常に有意義な

体験をさせていただきました。

視察後国内研修及び成果発表会では現地視察で知り得たネパールの災害に対する認識や地理的な復興の困難な実情をどのような事業を企画することで復興支援できるかをチームで協議し、成果発表会で発表しました。事業企画時には藤井先生より提供して頂いた事業計画構築シートを活用させて頂きました。その事業企画構築シートでは実現したいビジョンや現状の課題、対象者を明確化し事業の目標、事業概要を定めていくものとなっており、事業企画時に考えるべき事項を学ばせて頂きました。成果発表会では発表した事業内容の費用や事業収入面で各参加企業様よりご意見を頂き、事業を継続していく上で考慮すべき事項も学ばせて頂きました。

今回、ネパールが抱える社会的課題に対して、単なる情報収集にとどまらず、現地での実情調査や、課題解決につながる事業企画を行うことで、多くのことを学ばせていただきました。またネパールの現地の方々の価値観・文化や国連ハビタット様の行われている国際支援の重要性を深く理解することができました。この経験を踏まえ、今後も何かしらの形でネパールの復興支援に協力していきたいと考えております。

最後に、本プロジェクトの開催にご尽力賜りました関係各所の皆様、並びにご参加頂きました皆様に、心より深く感謝申し上げます。皆様のご協力により、無事にプロジェクトを進めることができましたこと、心より御礼申し上げます。今後とも変わらぬご支援を賜りますよう、何卒よろしくお願い申し上げます。

以上

株式会社 大建
原 慎之介

この度、貴重なプログラムに採択いただき、心より感謝申し上げます。本プログラムに応募した動機は、会社の紹介と、発展途上国を訪れて現地の状況を学び、視野を広げたいという思いからでした。プログラムは、事前研修、派遣プログラム、事後研修の3段階に分かれており、全体を通じて多くの学びを得ることができました。関係者の皆様に心から感謝いたします。

【事前研修】

事前研修では、藤井先生からネパールの現状の課題を見つけて、事業計画を立てる方法を教えていただきました。私はこれまで技術職として仕事をしてきたため、ビジネスの見つけ方や事業計画の考え方を学ぶことは非常に有意義な講義でした。

【派遣プログラム】

まず現地に到着して感じたのは、私が思っていたよりも発展し、活気があることです。空港を出た瞬間から、人や車がたくさん行き交っていました。

2日目のラリトプル市ブンガマティ地区の視察を行った際、2015年の地震による被害からの復興が進んでいる様子を視察することができました。地震前はレンガ造りの建物が主流だったが、復旧中の建物は鉄筋コンクリートの基礎を構築しており、より耐震性の高い建物となっています。この変化が非常に印象に残りました。

3日目の視察では、チャンドラギリ市にあるガネスマン・ポリテクニク・インスティテュートという職業訓練校を見学しました。この学校は崖の麓に建っており、訪れた際にその危険性を感じました。しかし、ネパールの国土の7割が山岳地帯であることを考えると、このような立地は仕方がないのかもしれませんが。見学を通じて、日本との感覚の違いにギャップを感じた一日でした。また、事前研修で私たちのグループで考えた村ごとのハザードマップを作成するという事業計画の可能性も感じました。

【事後研修】

事後研修では、派遣プログラムで感じたことを事前研修で考えていた事業計画に反映させることができ、ブラッシュアップしました。チームの皆さんとの話し合いでは、様々な意見や考えが出てきて、非常に面白い場となりました。

成果報告会では、発表後に質問や講評をいただき、今回の発表で不足していた考え方や視点が明確になりました。

【総括】

今回の研修の参加者は様々な職種の方々でした。多くの意見や考え方を聞くことができ、とても勉強になり、良い刺激を受けることができました。実際に現地を訪れ、

日本とのギャップを感じつつ、自分自身の視野も広がりました。今回の経験を無駄にしないよう、今後も研鑽を積んでいきます。本当にありがとうございました。

以上

■はじめに

今回、発展途上国の課題や現地の取り組みを学ぶこと、国際的な視点を持つ人材としての第1歩を踏み出すことを目的として、ネパールにおける現地研修に参加しました。研修では、現地の観光開発、職業訓練、地域コミュニティの取り組み、さらに日本の技術がどのように応用されているかなど、多岐にわたる内容を学びました。異文化に触れ、現地住民の実情を肌で感じることができ、これまで漠然と考えていた海外の現状がより身近に感じられる大変貴重な機会となりました。

■研修での活動内容

2日目は、観光開発および職業訓練に関わるトレーニングセンターを見学しました。市役所では、伝統的な木彫り彫刻のトレーニングが行われている様子が見られ、担い手不足が指摘される中、各所に美しい彫刻作品が並んでいました。

3日目は、チャンドラギリ市における市長との会合から始まりました。ネパールでは女性の社会進出が積極的に推進され、市長または副市長のいずれかが女性であるという制度が取られていることに驚きを覚えました。実際、チャンドラギリ市では副市長が女性を務め、そのリーダーシップが地域に良い影響を与えている様子が印象的でした。さらに、ルマンティとの会合では、女性を中心とした組合活動が紹介されました。少額の資金を各家庭から集め、銀行に頼らずに事業資金を融通する仕組みをつくりあげ、多くの資金を運用している様子から、女性の力と意志の強さが伝わってきました。

4日目は、日本の技術である「ためとつと」が実際に使用されている病院や浸水性の高い舗装材が使用されている公園を視察しました。事前研修で講演を受けた際にもその技術力の高さに驚かされましたが、実際に現地で貯められた水が蛇口から勢いよく飛び出す様子を目の当たりにし、日本の技術の精度に感動しました。ガイドの方が繰り返し「日本は水の王国」と話していたことが印象に残るとともに、ネパールでは各家庭が屋上に貯水タンクを設置し、日常的に水を大切に使っている姿がとても対照的に感じられました。

また、屋上での都市型農業の取り組みは、限られた都市空間を有効活用する先進的な試みとして非常に興味深いものでした。特に、現地ではスマートフォンを活用したアプリから都市型農業の手引書を確認できるようになっており、IT技術が地域の課題解決に貢献する可能性を強く感じました。ネパールでは意外にもスマートフォンの普及率が高く、このようなテクノロジーを活用することで、農業やインフラの発展を支援できるのではないかという新たな視点が生まれました。私は業務でアプリ開発に携

わっているため、現地のニーズに合った IT ソリューションの提供や、スマートフォンを活用した新たなビジネスモデルの可能性を感じました。

帰国後には、事前研修・事後研修を通して、日本の技術や取り組みを再確認するとともに、ネパールの課題解決に向けた事業計画の策定にも取り組みました。私たちのチームは、ネパールが力を入れている観光業を盛り上げるため、SNS とアプリを活用した観光事業促進計画を立案しましたが、SNS や IT 技術で解決できる可能性を感じつつも、実際のビジネスとして成立させるには金銭面を含めて数多くのハードルが存在することを実感しました。

■成果と課題、今後の展望

今回の研修を通じ、私はこれまで海外を遠い存在としてしか認識してこなかった自分に気づかされました。現地で出稼ぎに赴くネパール人が日本に来るという現実や、各界のリーダーや現場で活躍する女性たちの姿に触れることで、海外は決して抽象的な概念ではなく、身近で手の届く範囲にある世界であると実感しました。また、様々な業界の優秀な皆様と一緒に研修に参加することができ、自身の視野が広がりました。

■まとめ

本研修は、発展途上国が抱える多様な課題を学ぶだけでなく、事前研修・事後研修でのグループワークを通して具体的な解決策を模索するという点で、大きな意義を持っていました。ネパールの伝統技術や先進的な試み、そして女性の活躍の現場から、多くの刺激と学びを得ることができました。今回の経験を糧に、国際的な視点から物事をみることができるよう、日々邁進していきます。最後に、今回の研修に携わってくださった全ての方々に心から感謝を申し上げます。

以上

日本福祉大学大学院

渡邊 ゆり恵

今回の研修では、ネパールにおける都市開発、防災、持続可能な観光、農業、女性やユースの社会的・経済的自立に関する取り組みをHabitatの実施するプロジェクトを通して視察し、現地の人々がどのような課題を抱え、それにどう向き合っているのか直接現場の空気を感じることもできました。

災害からの復興という切り口では、視察1日目、2015年にネパールで起きた大地震で甚大な被害を受けたブンガマティ地区を視察し、Habitatの具体的な復興支援プロジェクトとその成果、復興がどう進んだのかの学びは興味深いものでした。建物の再建は地域住民と対話をしながら、今の暮らしをよりよくする形で、緑を取り入れつつ伝統的な建造スタイルを守る形で、より安全な建物に再建がされていました。再建と両輪で地域の伝統産業（木彫り、ホスピタリティ）への支援を住民主体で復興ができるような形で、地域の女性や若者を積極的に巻き込みながらトレーニングを実施する等の支援がされたという点も非常に印象的でした。また、もともと地域にあったお祭りをPR、また多くの人に参加したくなるような形で世界各国からの集客をし、街を盛り上げ、お金を落としてもらえるような取り組みに関しては、「伝統を守る」という視点と「新しい観光の形を作る」という視点が交差し重要な観点であると感じました。日本の地方を盛り上げる上でも大事な視点に感じました。

防災と都市開発という切り口では、視察2日目にカトマンズから30分ほどのチャンドラギリ市を視察し、観光や都市開発の視点で道路などの交通インフラが整備されることで、交通の利便性と地域の経済振興につながることで、その際に日本のODAの一環で整備されたトンネル建設などの交通インフラの整備一躍を買っているというお話が市長様からありました。

また市長様は過去にJICAの災害対策研修参加のため来日されていたり、JICA事業の一貫で行う研修へ市の有力者が参加し、日本への理解を深めている背景から日本の防災技術等のネパール進出を考えた際に、このような方々がキーパーソンにもなりうると感じました。チャンドラギリ市周辺では地滑りや洪水のリスクが高い地域が多いものの、対策が敷ききれていない現状がある中で、同じ災害大国日本の耐震技術や災害対応ノウハウ（耐震建築、エコシステム舗装、雨水利用など）をどのように適応させるかを検討し支援としてまたは、ピンチはチャンスと捉えビジネスとして持続的にどう生かせるかの可能性を探る事も併せて重要になると感じました。

女性の社会的、経済的自立という切り口では、ルマンティという貧困層の女性支援を中心に活動をするローカルNPOからのお話から組織化することで成し遂げられるインパクトの大きさを再認識できました。女性たちが自らグループを作り、貯金を始め、事業を起こし、リーダー格の女性は市長や議員になるまでの道のりや「自ら立ち

上がる仕組み」をつくり社会へ大きなインパクトを生み出している事に感動しました。社会の仕組みや構造として女性がこのような地位につける事も大切ですし、ネパールでは必ず自治体の幹部管理職に女性を含める事を義務づけ、制度で女性の地位向上や社会進出を側面的に支援している等この辺りは日本がネパールから学べる事の一つであると感じました。

都市型農業とカーボンフットプリント削減の取り組みの切り口では HASERA という NPO 団体の屋上菜園プロジェクトについて、現場視察しました。ネパール自体は人口の6割が農業従事者であるとの事ですが、都市化する都市部でもスペースを活用し農業が広がれば、輸送コスト削減や環境負荷の軽減につながる、とのことで、それを実践するためのオンラインでのマニュアル整備など、IT を駆使した形でのイノベティブな取り組み、NPO と民間がタックを組んだ取り組みはシンプルに面白いと感じました。

また自身の関心事であったフェアトレード事業に関して情報収集の観点では現地では多くは見られませんが、フェアトレードを基軸にして考えたときついつい、現地のもので日本へ持ってくるという観点で考えていましたが、現地で現地向けの国内市場でビジネスを実施する着眼点も重要である事も認識することができました。わざわざ、リスクの高い国際市場で勝負することが本当に効率的なのかどうかも含め再度自分の関心事への問いにたちかえるきっかけにもなりました。

ネパールは政治的課題や、産業的課題に加え地理的に不利な点などさまざまな要因からアジア最貧国の一つとされ、課題が多い中、街の中を歩いていると治安は非常に安定している点、また非常に忍耐強い国民性でどことなく日本に近い感覚もあるようにも感じました。現地滞在中、ネパールの方々はとても暖かく迎えてくれました。そして、日本に長期で留学をした訳ではないのにも関わらず、日本語そして文化の部分場で深い理解を持ち日本への敬意を持ってくれているガイドさん、そして最近日本にはネパールから働きに来てくれる方々が年々増えていく中で、日本を選んでくれる人たちを大切にしたいとより一層思うようになりました。

今回は、事前学習、現地研修、事後学習を通じ貴重な機会を享受できた事に深く感謝いたします。次のステップではこの経験を次のアクションにつなげていきたいと思っております。

以上